

Sophie's Choice 試論

——選択と罪悪と運命——

田 中 久 男

1979年6月にランダム・ハウス社から出版された *Sophie's Choice* は、William Styron (1925-) の長篇小説としては、*Lie Down in Darkness* (1951)、*Set This House on Fire* (1960)、*The Confessions of Nat Turner* (1967) に続く第四作目のもので、この著作リストに中篇小説の *The Long March* (1956；これは1953年に *discovery* 誌の創刊号に“Long March”と題して発表した作品のモダン・ライブラリー版)、戯曲 *In The Clap Shack* (1973)、“Dead” (1973) という John Phillips との共作のシナリオ、雑誌等に発表した文章とか講演原稿を集めた *This Quiet Dust* (1982)、それに7篇ほどの短篇を付け加えてみても、1979年6月に54歳になった作家にしては、決して多作とは言えない。彼ほどの才能のある作家にしては、むしろ寡作と言ってもいいだろう。しかし、たとえ寡作ではあっても、“the line of traditional storytellers”¹⁾ を頑ななまでに継承し、それを創作の基本線にしている Styron は、これまでに *Lie Down in Darkness*、*The Confessions of Nat Turner* 等のすぐれた作品を発表して、読書界に大きな反響を巻き起こしてきた²⁾。本稿で論ずる *Sophie's Choice* も例外ではなかった。この作品の暗い暴力的な世界、はなやかな文体、サスペンスの過剰等を南部ゴシック小説 (the Southern Gothic) の系譜に引きつけて読み、必ずしも好意的でない書評を書いた北部的感性の代表者 John Gardner でさえ、“a splendidly written, thrilling book, a philosophical novel on the most important subject of the 20th century”³⁾ だと認めている。この作品は映画権も50万ドルということで、Styron は現在のアメリカ文学界の中では“most establishmentarian of writers”⁴⁾ と見られているようで

ある。

Styron は60年代に、人種問題がアメリカ社会に吹き荒れていた最中に、黒人奴隷を主人公にした *The Confessions of Nat Turner* という問題作を世に問うた。この小説は、黒人奴隷の反乱(1831)の単なる狂信的首謀者として歴史に埋もれている人間の内面に光を当て、“recreate a man and his era”⁵⁾ することを試みたものである。そして *Sophie's Choice* を書いた動機として、作者は “As with Nat's rebellion, I wanted to deal with the Auschwitz experience as a big moment in history.”⁶⁾ と述べているが、この作品は、先述の問題作を書いた作者の関心の方向から、必然的に生まれる運命にあったと言ってもいいだろう。

Styron は Morris とのインタビューで、人間が他の動物たちと違って、限りない悪を犯す可能性を秘めた存在であることを、次のように語っている。

To me, the universe is benign or indifferent. We don't know why we're here; at least I don't. And yet the possibilities of life are limitless. We exist capable of great joy, ecstasy even. And these make the whole trip worthwhile. But the fly in the ointment, what pollutes the whole thing, is this evil which human beings alone are capable of.... We ourselves are the agents of our own destruction, and this is what makes human existence so desperately perilous. Our beautiful opportunities which we have as human beings are absolutely destroyed because of our proclivity toward hatred and toward massive domination of each other. That is slavery and Auschwitz!⁷⁾

人間存在が内にかかえる劣悪な性癖と、そこから生まれる悪が大規模な形で歴史に顕現したものが、アメリカ南部の奴隷制度とアウシュヴィッツの強制収容所であると作者は考えている。つまりこの二つは、“anti-human”, “anti-life”⁸⁾ という絶対悪 (absolute evil)⁹⁾ が支配した制度なのである。このような制度を作り出す人間の限りない悪への性癖、作者の言葉を使えば “the largest mystery

of human existence¹⁰⁾ の深淵に迫ろうとすること、これがこの作品を書いた作者の意図であったに違いない。従って彼は、ナチスによるユダヤ人大虐殺という意味で使われる“Holocaust”という言葉の代わりに、“the Auschwitz experience”という言葉を使っているが、その理由は、強制収容所という制度の悪が、“anti-Semitism”という概念を超えて、反人類、反生命という絶対悪に関わる問題だからである。Shepherd も指摘しているように、作者は「ホロコースト」を希薄化し、それをユダヤ人の体験から切り離して一般化、普遍化しようとしたのではなく、「ホロコースト」¹¹⁾ という固定観念を突き抜けたより広い視点から、絶対悪の本質と、その悪の創造者でもある人間の真実の姿を追求しようとしたのである。¹²⁾

Gardner が “Thematically, the novel treats the familiar...Styron subject, the nature of evil in the individual and in all of humanity.” と指摘している通り、この作品の主題は悪の問題である。しかしこれには、表題に示されている選択 (choice) の問題と、運命の偶然性¹³⁾ の問題も関わっているので、本稿ではこれらをからめて考察してみたい。だが順序として、まず16章 623 頁にもわたるこの作品の “a large canvas”¹⁴⁾ の枠組みを支えている語り¹⁵⁾ の一人称形式の問題を検討し、続いて物語構成に関わる三人の主要な人物像を分折しておく方が、この長篇小説の理解に有益であるように思われる。

1

インタビューで Morris に、この作品では語り手と作者が同一人物であるのが見え過ぎると指摘されて、Styron は “I wanted at any moment to become as autobiographical as I chose to be—with all the stops pulled out.” と述べ、この作品がゆるやかな形の自伝小説であることを認めている。¹⁶⁾ この小説が一人称の語りを用いているのは、*Set This House on Fire* も *The Confessions of Nat Turner* も一人称小説であるという事実と考え合わせると、作者のこの形式への偏愛とも言うべき傾斜が窺えて実に興味深い。一人称形式を使う理由として彼は、“immediacy” の効果のため、あるいは語りに “a kind of authen-

ticity”を与えるためだと述べている。これは換言すれば、読者を物語の世界に引きずり込んで、語り手と共に諸々の出来事を目撃しているかのような臨場感、高揚感を生み出し、物語の構築における語り手と読者の一種の共同作業意識を作ることである。¹⁷⁾

この小説の語り手は、冒頭の次のパラグラフの初めで“Call me Stingo, which was the nickname I was known by in those days, if I was called anything at all.” (p. 1) と自己紹介している。このくだけた調子の語り口は、Melville の *Moby Dick* (1851) の1章の劈頭にある“Call me Ishmael.” という言葉、あるいは Ellison の *Invisible Man* (1952) の冒頭近くで、語り手が“Call me Jack-the-Bear, for I am in a state of hibernation.” と自己紹介する言葉を思い起こさせる。¹⁸⁾しかし *Moby Dick* と *Invisible Man* はどちらも一人称小説でありながら、物語構成の点では決定的な違いがある。即ち、後者では語り手がそのまま物語の主人公になっているが、前者の場合、語り手は物語の中心舞台に立つ主人公を観察し、彼の物語を綴る役割を担っている。この *Moby Dick* の構成に似ている一人称小説としては、Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925)、Penn Warren の *All the King's Men* (1946) が典型例としてすぐ思い浮かぶが、¹⁹⁾これらの作品の共通点は、比較的若くて内省的傾向と道徳意識の強い語り手が、何らかの夢、野望の達成に情勢を燃やしながら劇的で数奇な人生を辿る主人公、あるいは物語の中心人物の生き方を観察し、想像し、それに反発と共感を覚えながら物語を構築していくということである。そして語り手の方はその過程で、主人公の悲劇的人生の航跡が暗示するものを愛惜しながら、人間存在と世界との不可思議な深い領域に開眼していくのである。それ故、主人公の物語と同時に語り手自身の物語も、作品構成の要石となっている。

同じように *Sophie's Choice* も、主人公の気質、生き方等においては上記の作品との違いはあるものの、構造的には、表題に示されている Sophie の物語でありながら、同時に語り手 Stingo の物語にもなっている。従って“*Sophie's Choice* is essentially a *bildungsroman*.” という Cobbs の見解は、この作品²⁰⁾

を Stingo を主人公にした、いわば「教養小説」として読むなら基本的に正しい。しかし Thomas Wolfe の *Look Homeward, Angel* (1929), *Of Time and the River* (1935) 等に見られるような、主人公の精神の遍歴と開眼を物語の中心軸としたタイプの小説と違って、*Sophie's Choice* では、Stingo の物語が単に一本線として作品を貫いているのではなく、彼の物語と Sophie の物語とが多面的、重層的に交響し、しかもこの二人の物語を劇的に進行させる一種の触媒として、Nathan という魅力的な人物の物語も絡まっている。つまり構造的には、「アウシュヴィッツ体験」を持つポーランド女性で、かつては敬虔なカトリック教徒であった Sophie Zawistowska の物語だけでなく、ヴァージニア州南東部のサウスハンプトン郡出身の WASP である Stingo の物語でもあり、更にこの二人の物語に、ニュー・ヨークのブルックリン出のリベラル派のユダヤ人 Nathan Landau の物語が絡まっている。奴隷制度の陰の中にいる Stingo と、「ホロコースト」を最も身近かに口に出来る Nathan とが、「アウシュヴィッツ体験」という暗く重苦しい記憶に閉じ込められている Sophie と関わって、いわば「三角関係」(triangle²¹) をなしている。歴史的、文化的、社会的背景が三者三様に違う人物たちが、精神的に牽率と離反を繰り返しながら物語を展開するわけで、これには当然、強制収容所と奴隷制度、北部と南部、南部とポーランド、過去と現在等の対比が意図されていて、この作品を奥深く濃密なものにしている。この小説が読者を圧倒するような迫力を生み出しているのも、一つにはこのような構造が実に有機的に働いているからにほかならない。

2

Sophie と Stingo と Nathan はそれぞれ違った背景を持っていながら、興味深い共通点を備えている。それは強い文学愛好癖である。作家のペルソナである Stingo は、1947年22才のとき、McGraw-Hill という大手出版社を解雇されたあと、故郷で15才のとき恋心を感じていた Maria Hunt の死の悲報に接し、“the tormented, alienated girl going to her lonely death” (p. 547) の物

語を、*Inheritance of the Night* (p. 547) という作品に結実させようとしている作家志望の若者である。従って当然役にとっては、“reading was still a passion” (p. 12) であった。Nathan は自称ハーヴァード大学の修士で、Pfizer 生物学研究所の研究者であるが、作品の終盤近くの14章で明らかにされるように、実は研究所の図書館員で“paranoid schizophrenic” (p. 518) である。彼は妄想性精神分裂病者として、正規の大学教育は受けておらず、第二次大戦中は兵役免除者(4F)になっていた。しかし大戦中は“Proust and Newton's *Principia*” (p. 519) を読んでいたこととか、Stingo との会話でも“very keen literary judgments” (p. 516) を見せていることから判断すれば、彼の文学愛好癖は並はずれて強いものであったはずである。事実、“There was a time... when he considered writing himself.” (p. 516) と兄が証言しているように、Nathan は作家を志したこともあるのである。Sophie は整体指圧師(chiropractor)のユダヤ人 Dr. Blackstock の診療所で働く合い間に、ブルックリン大学の自由聴講クラスに通って英語力をつける努力をし、Nathan と同棲生活を始めてからは、“Malcolm Cowley's *Portable Faulkner*” (p. 156) 等のアメリカ文学に親しもうとしている女性である。この彼女が小説の終局近くで、Nathan の狂気の発作から逃れて Stingo とヴァージニアへ下るとき、“I want to write about Auschwitz, ...I want to write about my experiences there...” (p. 553) と述べている。彼女は Stingo とか Nathan のように作家志望ではないにしても、少なくとも書く行為を通して、「アウシュヴィッツ体験」の心の重荷を吐き出したいと望んでいたことは間違いない。

このように Sophie と Nathan と Stingo の三者が、程度、方向の違いはあっても、ものを書くことに深い関心を示している事実は、偶然の一致と片付けてしまうことのできない重要な意味を持っているように思われる。三者が同類の関心を持っていることは、確かにこの作品全体の色調を染めている運命の偶然性という人間の世の不可思議な営みを映し出すことに加担しているが、このことよりもむしろ、書くという行為に興味を持っている三人の精神の内実を浮き彫りにする働きをしているのである。文学に深い関心を寄せる人間が真摯に

創作を志す場合、その行為は、その人間が現実と折り合いが悪く、しかも強迫観念と化したようなこだわりが絶えず心をむしばんでいるとすれば、それだけいっそう精神の沈澱物を吐き出そうとする、凄まじい真剣な様相を呈するであろう。創作行為はそれを目指す人間にとって、まさに自己回復と悪魔払いの役目を果たすように思われる。書くことに関心を持つ三人の心の底には、程度の差はあっても、このような自己回復と悪魔払への願いが渦巻いていたと考えても、間違いではあるまい。

Stingo が *Inheritance of the Night* を書き始めた動機には、同郷のかつての恋人に対するロマンティックな心情が作用していなかったとは言い切れない。しかし彼と Maria とが、グリニッジ・ヴィレッジという同じ区画に同じ時期に住みながら、二人は “the city's inhuman vastness” (p. 51) の中で顔を合わせることもなく、彼女はビルの窓から投身自殺をして、身元が判明せず何週間も “a pauper's grave” (p. 52) に埋葬されていたという孤独な死を遂げたのに、Stingo の方は、非人間的な大都会の中で “the pain of unwanted solitude” (p. 13) という孤独地獄を味わいながら、Sophie と Nathan との知己を得て、現実世界との折り合いの悪さから救われる契機を獲得できた。この運命の苛酷な選別は、後述する George Steiner の説 (世の中の大きな矛盾) を示す一例であるが、Maria の死が示唆する “this senseless story of young despair and loss” (p. 51) に、Stingo は、“a state of real upheaval” (p. 51) に陥るほどの苦しみと悲しみを感じた。そして彼女の死と家庭の悲劇を知らせる彼の父の手紙を読んだ Stingo は、以後 Maria の悲劇を題材にして小説を構想していくとき、彼女の死が宿命的 (doomed) で、彼女は “hell” (p. 132) に近いような家庭の不和の “a victim” (p. 132) であったという思いに深く捉えられている。“With me the most memorable of dreams...have dealt with either sex or death.” (p. 54) という文章が示しているように、彼の夢を支配する要素は性か死であり、その中心人物は彼女である。従って、彼女の悲劇を種にして “to write my guts out” (p. 72) を試みることは、“a staggeringly puerile inexperience” (p. 247) に極まされ、彼女に関する “the most fero-

ciously erotic hallucination” (p. 52) に襲われる彼にとって、鎮魂の気持をこめた一種の悪魔払いであった。と同時に、想像力で性を含めた諸々の経験不足を補い、精神の成熟と安定を図ろうとする真剣な試みでもあったのである。

“Ever threatening at the margin of her consciousness were the shape and shadow, the apparition of the camp...” (p. 111) という説明からも分かるように、Sophie の意識を絶えずむしばんでいるのは、悪夢の巣窟と化している収容所の忌わしい記憶である。その中でも特に “the self-hatred and sense of guilt” (p. 177) を覚える記憶は、小説の表題にこめられている恐怖の選択の瞬間である。1943年4月1日に彼女は、二人の子供と抵抗組織のメンバーと一緒にアウシュヴィッツに到着し、ナチス親衛隊大尉で医学博士の Fritz Jemand von Niemand によって、ガス室か強制労働、つまり生か死かの選別を受けたとき、生の世界に残す子供を一人選ぶように強要され、息子 Jan を残し娘 Eva を手から放してしまう。この残酷極まる選択の瞬間の記憶は、彼女には自己嫌悪と罪悪感の種となり強迫観念と化していた。これから解放されたいという気持ちと、呪うべき体験が無の世界に消えることを防いで、生きた人間の苦悩の証しを残しておきたいという願望が、「アウシュヴィッツについて書きたい」という言葉として表われたのである。この願いはもし実現されれば、彼女にとって自己回復と悪魔払いの手段になり得たのではないかと思われる。彼女が文学作品を読むことを心掛けていたのも、これがその手段の代わりになることを認識していたからである。

Sophie にとって他の重要な代用手段は、Stingo を “those religious confessors she had coldly renounced” (p. 177) の代わりとして、彼に自己の過去を告白することである。そのことを彼は、“it doubtless would have been unbearable to the point of imperiling her mind had she kept certain things bottled up” (p. 177) と見抜いている。信仰心を捨ててしまった彼女には、精神の支えとすべき宗教も神もない。それ故、自己の過去を語り告白することは、胸を刺されるほど苦しいことではあっても、精神の回復を徐々に図り、記憶を和らげる手段であった。この目的のための別の手段は、音楽を聞くことであっ

た。音楽の教授を母に持ち、8歳の頃からピアノを習い、“I would study music” (p. 98) という夢を持っていた彼女には、音楽は彼女の“life's blood” (p. 565) であった。ヴァージニアへ下る逃避行中にも、“We will have music where we're going, then, Stingo. I wouldn't be able to last long without music.” (p. 565) と訴えるのも、音楽の世界がたとえ一時的にはあっても、彼女の精神の苦しみを和らげ、夢魔的な記憶から逃れる聖域になりうることを、彼女がはっきり意識していたからである。

過去の告白とか音楽の世界よりも、恐らくもっと大きな働きをしていたのは、性の世界である。Stingo が成熟した彼女の魅力にひかれた理由の一つは、“anticipation of guaranteed sexual fulfillment” (p. 131) であったが、同じ激しい性的渴望でも、性が彼女に対して持つ意味は、Stingo にとってよりもはるかに深刻で重大であった。彼女を通じて初めて性的充足を果たした彼は、そのことを次のように悟っている。

Sophie's lust was as boundless as my own, I'm sure, but for more complex reasons; it had to do, of course, with her good raw natural animal passion, but it was also both a plunge into carnal oblivion and a flight from memory and grief. More than that. I now see, it was a frantic and orgiastic attempt to beat back death. (p. 603)

色情狂とも言えるほど性の営みにのめり込む彼女の肉欲は、実は、記憶と悲しみから逃れて忘却の世界に入ろうとする願いの表われであり、そしてそれ以上に、死を撃退しようとする狂躁的な試みなのである。彼女が Nathan との性の狂態じみた行為を受け入れることができたのも、性の力が記憶にまつわる苦しみと悲しみを溶解し、生への執着心を強めて、死に対する防波堤となってくれることを、必死に願っていたからにはほかならない。

Sophie が肉体的にも精神的にも再生する手助けをしたのは、Nathan である。彼女はブルックリン図書館で、拙い英語力を頼りに Emily Dickinson の詩集を捜そうとしたとき、図書館員にひどい応対をされて失神したが、Nathan

に助けられて優しいいたわりを受け、肉体的衰弱も兄の Larry の援助による検診と治療で回復し、この“cinematic” (p. 118) な出会い (後述する運命の偶然性の一例) によって、二人は同棲生活を始めた。Nathan は彼女にレコードを大量に与えて、彼女の「生命の血」である音楽を聴く機会を作った。そして “It would take Nathan, ...Nathan with his liberated and passionate carnality, to unlock the eroticism in her which she never dreamed she possessed.” (p. 117) という説明にある通り、彼の憚ることのない情熱的な肉欲によって、彼女の中に眠っていた性欲を燃え立たせ、生の喜びを生み出す生活様式を曲がりなりにも確立した。断続的にはあっても、これによって彼女は悪夢から離れることはできたのである。このような意味で彼は “her savior” (p. 163) であった。

しかし、すでに触れたように、Nathan は妄想性精神分裂病者である。理性と狂気の世界を激しく往復する彼に合わせて、Sophie も心身共に、いわば天国と地獄の状態を繰り返さなければならない。理性が狂気の発作を押えているときには、“consider how intimately life and death are intertwined in Nature, which contains everywhere the seeds of our beautitude and our dissolution” (p. 405) と言って、天才が自然の奥深い営みの謎を一瞬にして見抜くかのような、鋭い知性の一端を見せる。あるいは、Stingo の創作に窺われる、Faulkner, Penn Warren, Thomas Wolfe, Carson McCullers (p. 226) 等の作家の影響を指摘して、深く幅広い読書量を背景に、若き作家志望の Stingo を畏怖させもする。しかし Nathan は分裂病者として、“latent capacity for rage and disorder” (p. 228) を持っていて、精神が錯乱状態になると、Sophie と Dr. Blackstock との、最後には彼女と Stingo との肉体関係を疑って、彼らを憎悪と嫉妬の対象にしてしまうのである。

Nathan の分裂病を Shepherd は、精神分析学の視点から、“an advanced case of sibling rivalry” と解釈している。兄 Larry は、コロンビア大学の医学部で講じた経験を持ち、第二次大戦中の戦功では、“the Navy Cross—a citation not too often achieved by a medical officer (a Jew to boot in an

anti-Semitic Navy)" (p. 160) を受け、現在は "stunningly pretty and meltingly pleasant" (p. 519) な妻を持ち、"a large comfortable apartment" (p. 516) に住み、大きな泌尿科医院を開業して、社会的成功を獲得している俊才である。Shepherd が言うように、彼はまさに "an attractive version of the American success story"²⁴⁾ である。この兄に比べると、大学教育も受けず、精神病院で治療を繰り返し、結婚もせず、父の縁故で研究所に職を得た弟は、少なくとも社会的には敗残者である。従って、彼が兄のような成功者になれないために、劣等感と自己嫌悪とうっ屈した焦燥感に苦しめられたに違いないということは、十分想像できることである。しかし、Shepherd が "his [Nathan's] tangential, rather abstract relation to the Jewish experience"²⁵⁾ と片付けている問題は、作品構成におけるユダヤ人 Nathan の重要な存在を考えると、もう少し細かい注意を要するに思われる。

Larry は Nathan のことで Stingo と面談したとき、"Nathan is boundlessly bright, maybe a genius.... But he never got his mind in order." (p. 518) とか、"But when one is as sick as Nathan has been one simply cannot find the continuity to get a formal education." (p. 518) と説明しているが、この言葉から判断すると、Nathan は天才的な頭脳の持ち主でありながら、先天的に精神分裂病にかかっていたようである。しかし Larry の証言によると、第二次大戦の一年ほど前、Nathan が10代後半の約2年間、この病気の発作は完全におさまっていたのに、ある夜 "a furious argument" (p. 519) の末、彼は家に放火するという突飛な事件を起こしている。この激論の内容について兄は一切語っていないが、放火事件が大戦勃発 (1939) の一年ほど前ということは、ナチスが政権を獲得 (1933年1月) して以来、ユダヤ人排斥運動 (anti-Semitism) が、ドイツとその近隣諸国で急速に勢いを得た時期に当たるわけで、恐らく感受性の強いユダヤ少年の Nathan は、ヨーロッパ戦線に兵士として参加する希望と意志を示し、父と兄を相手に激論を交したに違いない。事実 Larry は、"During one of his lucid periods he did try to join up with the paratroopers, but we nipped that one in the bud." (p. 519) と述べている。

しかし Nathan は分裂病者のため、兵役免除にならざるを得ず、それ故に、やり場のない怒りと焦りを、放火という行為で表わしたのではないかと思われる。

Nathan がユダヤ人として、人種差別に敏感に反応し、激しい敵意と憎悪を示すことは、ポーランド女性 Sophie と南部人 WASP の Stingo への対応に映し出されている。このことを考える手掛りとして、Nathan の関心の方向を如実に示している次のような一節を、まず見ておく必要がある。

The first news of the camp atrocities had been made public, of course, in the spring of 1945, just as the European war ended.... Until now he simply had not allowed himself to believe. But now he believed, all right. He had made up for lost time by absorbing everything available on the camps, on Nuremberg, on the war, on anti-Semitism and the slaughter of the European Jews.... (p. 393)

戦争終結後に強制収容所のことを知った Nathan が、それらに関する文献を貪るように読んだという事実は、彼がユダヤ人として、いかに激しい精神的衝撃を受けたかを物語っている。このことは、“she [Sophie] reflected with wonder how Nuremberg and its revelations had so powerfully taken possession of Nathan's thoughts during the past couple of months” (p. 392) という文章によっても証明されている。戦争中は自国で “Proust and Newton's *Principia*” (p. 519) を読んでいた男が、ニュルンベルクでのナチス戦犯の国際裁判の実況放送で、“the Nazi handiwork” (p. 392) のことを聴き、ニュース映画でユダヤ人同胞の “massacre” と “martyrdom” (p. 392) の様を見、新聞の連載記事で “the full scope of the extermination of the Jews at Treblinka” (p. 393) を読んで、深く激しく魂を揺さぶられたことは想像に難くない。“an undemanding sinecure where he can do a lot of reading without bothering anyone” (p. 517) にある彼にとって、読書と音楽と性の世界が彼を分裂病の発作から遠ざけて、一種の自己回復と悪魔払いの働きをしていたと思

われるが、マス・メディアが暴露したナチスの暴虐は、彼にキリスト教社会におけるユダヤ人としての自己の正体 (identity) と、“the meaning of the Absurd, and its conclusive, unrevocable horror” (p.567) を痛切に認識させたに違いない。これが彼の精神の安定を崩す大きな要因になったのではないかと思われる。従って、彼は Sophie に対しては “her own Danny Kaye, her own adorable clown” (p. 392) として、生への愛と喜悦を支える存在である。しかし同時に、“his demonic side—that Mr. Hyde persona” (p. 508) が頭をもたげてくると、“the multitudes at Auschwitz choked slowly on the gas” (p. 254) であるのに、どうして彼女が生者の側に回れたのか、あるいは、“the same anti-Semitism for which Poland has gained such world-wide renown” (p. 255) が、彼女の生命を救ったのではないかと問い詰めて、彼女を悪夢の世界に回帰させる非情な悪魔的な存在にもなるのである。

彼はユダヤ人の血の故に、“the evil of Nazi totalitarianism” が “anti-Semitic” だけでなく、“anti-Christian”²⁶⁾ でもあったという視点に立つ精神の余裕が持てなかった。そのために「アウシュヴィッツ体験」よりも、「ホロコースト」という見解に縛られざるを得なかったのである。彼は次第に “drug-induced derangement” (p. 508) を強めて行き、Sophie を “a perfect replica of Irma Grieser” (p. 408) だと侮蔑し始め、“a suicide pact” (p. 377) を彼女に強要する末遂事件を起こし、自己破滅的衝動に彼女も引きずり込んで行く。彼女も自己の罪惡に対して愆罪を求める破滅的願望を募らせ、彼の麻薬耽溺 (p. 378) に合わせて “drinking” (p. 377) に浸り始め、溺死を試み (pp. 443-44)、最後には彼と心中する形で死を選んでしまう。現実的にも象徴的にも、Nathan は彼女にとって「救い主」であると同時に、“her destroyer” (p. 163) でもあった。²⁷⁾

南部人 Stingo に対する Nathan の潜在的反発が、典型的に吹き出ている挿話は、Stingo がミシシッピ州の Theodore Bilbo 議員の死を悼み、“Bilbo is less villain than a wretched offshoot of the whole benighted system” (p. 251) だと擁護するのを、彼が激しくなじる場面である。Stingo は Bilbo

を James K. Vardaman とか Huey Long たちと同類の政治家と見て、“these men, basically decent and even visionary to begin with, were brought down by their own fatal weakness in face of the Southern racial tragedy” (p. 231) と同情的に考えるのに対して、Nathan は Bilbo を Hitler と同列に置き、Bilbo 弁譲に隠蔽されている Stingo の “‘ingrained’ and ‘unregenerate’ racism” (p. 253) を厳しく非難する。その上、彼が創作中の作品の老黒人女性を “caricature” (p. 253) に過ぎないと裁断している。彼に対する Nathan の反発には、Shepherd も指摘しているように、彼が Nathan から Sophie を奪う “another, young brother” で、“another enemy and betrayer” になる可能性に対する潜在的恐れと、彼とは違って、作家になる夢を諦めてしまったことから生まれる、くすぶり続ける敵意と嫉妬心が隠されていただろうが、それと同時に、奴隷所有者の末裔に対する、“a New York Jewish liberal” の敵愾心にも似た怒りと反感が、紛れもなく潜んでいたのである。²⁸⁾

3

Styron は1950年代半ばに *Paris Review* 誌のインタビューを受けたとき、“I don’t consider myself in the Southern school, whatever that is.”²⁹⁾ と言って、南部派の作家と見られるのを嫌う素振りを示したが、1970年代の別のインタビューでは、“But as I go along I do understand there is still a strong pull in my work toward trying to explain or express certain southern biases, certain southern sympathies, certain southern apprehensions.” と認めて前言を微妙に修正し、更に続けて、自分は Endola Welty とか Flannery O’Connor のような “regional” な作家ではなく、“I felt a far more cosmopolitan sense of direction, and I needed to get out of the South because it was no longer a deeply involved part of my psychic nature.”³⁰⁾ と説明している。彼の説明の要点は、南部的感性が彼の作品に残っているのは否定し難いが、しかし、作風が一つの地方色に縛られるのではなく、もっとのびやかな広い方向に展開することを目指しているということである。

実際、*Sophie's Choice* もそのような意図のもとに構成されている。それが顕著に窺える例は、強制収容所と奴隷制度をつなぐ糸として、ポーランドと旧南部との類似点を考察しているところである。旧南部が北部からの渡り者 (carpetbaggers) に痛めつけられたように、ポーランドも近隣諸国に踏みこじられ、その結果どちらも “a frenzied nationalism” (p. 301) を育んだ。そして共に “a poverty-ridden, agrarian, feudal society” (p. 301) で、“pride and the recollection of vanished glories” (p. 301) に固執する傾向があり、“an entrenched religious hegemony, authoritarian and puritanical in spirit” (p. 301) とか “the passion for horseflesh and military titles, domination over women, ...a tradition of story-telling, addiction to the blessings of firewater” (pp. 301-302) という類似点を持ち、人種問題では “centuries-long, all-encompassing nightmare spells of schizophrenia” (p. 302) を共有している。これらの指摘は、旧南部の末裔である Stingo がポーランドという異国出身の Sophie を深く理解していくための、単なる基盤作りをしているのではなく、現在を時間の大きな流れの中で眺めようとする歴史感覚と、人間の諸々の営みに顕現する悪とか悲劇は、人間の悪への性癖故に、時代と場所を問わず、常にどこにでも現われる悲しい現象と見なす悲劇的感覚、この二つの感覚を作品に貫き通すことによって、Stingo が開眼し認識していく事柄に、大きなパースペクティヴと深い意味を与えようともしているのである。

作者の歴史感覚が生み出した見事な挿話は、強制収容所と共に人類史上の比類ない汚点になっている奴隷制度の遠い余波、Hawthorne とか Faulkner の文学に感じられる「過去の現在性」、とも言えるものである。Stingo の祖母が孫たちに贈ると遺言していた金が発見され、彼はその分配金 485 ドルを受け取ることになったが、この金は日く付きのもので、Stingo の曾祖父が1840年代に、ヴァージニア州ピーターズバーグの競売で買った三人の黒人奴隷 (少年と妹二人) のうちの16歳の Artiste 少年が、“‘improper advance’ toward one of the young white belles of the town” (p. 35) したという噂を根拠に、町中に脅迫と暴力の気配が広がり始め、少年の身の安全を考えた曾祖父が、彼を奴

隷商人に売り渡して得た金 (800ドル) だった。しかし少年の「不適切な言い寄り」は、“hysteric” (p. 36) な白人女性の作り話 (Faulkner の “Dry September” [1931] の状況設定によく似ている) であることが判明し、その結果、曾祖父は黒人家族を引き裂き、無実の少年を “the grinding hell of the Georgia turpentine forests” (p. 36) に売ってしまったことで、それ以後 “grief and guilt” (p. 36) に苦しめられたのである。奴隷制度内で起こったこの悲劇を、手紙で Stingo に伝えるのが、“an almost lifelong Southern liberal, conscious of the South's injustice” (p. 351) である彼の父親であり、その父を通して、百年も昔の出来事の余波を Stingo が受けるという組み立てに、過去と現在との持続を確認しようする作者の歴史感覚がのぞいている。

この持続の確認の他に、少年と曾祖父の悲劇が伝える意味は、ある社会全体が存立の基盤を置いている大きな悪の制度の中では、被圧制者の生命は、“the simple but absolute *expendability* of human life” (p. 286) という原則で処理される “death-in-life” (p. 288) であるということだけでなく、圧制者の側に立つ個々の良心とか良識は、押し潰されてしまうということでもある。この意味において、Stingo の祖先にまつわる悲劇は、Sophie が告白する体験の中の話の照らし出す役目をしている。アウシュヴィッツの司令官で彼女を秘書に使った、ナチス親衛隊中尉 Rudolf Franz Höss は、“a Catholic priest” (p. 180) になるはずだった男だが、第一次大戦勃発で運命が狂い、絶対的な軍事機構の “automaton” (p. 180) になって任務を遂行する一方、生身の人間故に、“a convulsive despondency, megrims, anxiety, freezing doubt, inward shudders” (p. 185) に苦しめられ、“tinges of conscience, even of remorse” (p. 180) の激しい発作に襲われてもいる。同様に、Sophie に対して “a totally unpardonable sin” (p. 590) を犯した Dr. Niemand も、もとは Höss と同じように “a steadfast churchgoer” で、“he had always planned to enter the ministry” (p. 591) だったが、“a mercenary father” (p. 591) のために運命が狂い、絶対悪の体制の中で “shred his reason” (p. 593) を余儀なくされ、“Where is the God of my fathers?” (p. 593) という魂の叫びと苦悩を、酒の力で麻痺させて

いる。Stingo の曾祖父も Höss も Niemand も、組織社会の “victim and accomplice” (p. 266)、即ち、その社会の中で共犯的罪を犯す加害者でありながら、一方では、良心の疼きと罪悪感に苦しめられる犠牲者にもなっているのである。その最も象徴的存在は、子供の選択をすることで組織の共犯者に仕立てられ、そして自己嫌悪と罪悪感に苦しめられる犠牲者になっている Sophie である。

少年と曾祖父に関する挿話は、以上見たような形で交響しているだけでなく、この作品の色調を染めている運命の偶然性あるいは皮肉という点でも、Sophie の物語に波及している。曾母から遺贈された罪に汚れた金は、出版社を解雇されて無職になった Stingo が生計を維持し、創作に専念することを可能にしたが、これは紛れもなく運命の偶然のなせる業である。一方 Sophie は、法学専攻の “tyrannical” (p. 290) な父 Professor Bieganski を憎悪していたが、“the romantic inheritor of the German culture and of another century” (p. 305) の父の影響でドイツ語を覚え、彼の強制でタイプと速記の技術を習得したことが、“a small elite” (p. 284) として Höss の秘書になり、結局は生命を維持できたという彼女の運命に大きく作用している。そして皮肉なことに、“an aspiring Jew-killer” (p. 296) として、ユダヤ人の “total abolishment” (p. 293) を説くパンフレットを著した父も、父の “lackey” (p. 304) として嫌悪し侮蔑していた夫 Casimir も、ナチスの絶対悪の体制の前では、“another doomed cipher” (pp. 305-306) に過ぎない存在として、死の世界に回されてしまった。

人間の生の営みに不可思議な絵模様を織り上げていくこの世の非情ななりわい、作者が “the universe is fairly indifferent and doesn't care”³¹⁾ と言いつける宇宙の無関心は、運命の偶然で、人間の生死、運の良否をいとも簡単に選別してしまう。この作者の悲劇的世界観が、*Sophie's Choice* の全体を貫いている。その意味で、Stingo の出版社時代の上司の Farrell の息子 Edward に関する挿話は、運命の非情な偶然性に読者の注意を促す、すぐれた導入となっている。Stingo と同じく作家志望で海兵隊員だった Edward は、1945年22歳

のとき沖繩で戦死したのに、Stingo の方は彼の数日後に同地を踏みながら、戦火の恐怖に遭遇することもなく、無傷で生還できた。この二人の運命の違いは、George Steiner の説く “the two orders of simultaneous experience” (p. 262) の恐ろしい矛盾、即ち、“good time” と “inhuman time” (p. 263) とが、同一の世界の同一の時間帯に起こりうる不条理 (the Absurd) を示唆するもので、Sophie がアウシュヴィッツに到着した1943年4月1日に、Stingo がノース・カロライナ州ローリーでバナナを食べていた (pp. 263, 567) という恐ろしい矛盾と響き合っている。

4

Sophie が Dr. Niemand から子供の選択を強要された “this theoretical but symbolic moment”³²⁾ が、作者も認めているように、いわばこの作品の胚種である。そして作品の構成上、この瞬間が中心的 “metaphor”³³⁾ となって “radiate outwards”³⁴⁾ するように、つまり、作品の中の他の諸々の選択あるいはその瞬間に波及し、それらと交響するように仕組まれている。子供の選択が Sophie に消し難い罪悪感を残しているのと同じように、母の死に関する記憶が、Stingo の強迫的罪悪感の種となっている。彼は12歳のとき、友達の兄の優美な新車に魅せられてドライブをしたが、帰宅が遅れたために、癌で肢体が不自由な母は、暖炉の火が消えた寒さの中で死の恐怖に直面していた。この出来事以来、“my abandonment that day had sent her into the long decline from which she never recovered” (pp. 361-362) という思いが、彼を苦しめ、母のみじめな死と “her ravaged, still terrified gaze” (p. 361) を思い出す度に、彼は “a stab of anguish upon my guilt” (p. 360) を覚えずにはいられなくなっている。“a new Packard clipper” (p. 60) の魅力に負けてドライブに参加することを選んだために、彼は病弱の母を見捨てるという罪を犯かしてしまったのである。

同じように Stingo は、Nathan を監視し、時折彼の症状を報告するように Larry から要請されていたのに、“negligence” と “abandonment” (p. 522) の

罪を犯し、Sophie と逃避行することを選択しているし、更に、彼女に置き去りにされた後、一人で故郷に下ることを選択し、結果的には、彼女と Nathan の死を回避する可能性を放棄してしまうことになった。それ故、“To the guilt which was murdering her just as surely as her children were murdered must there now be added my own guilt for committing the sin of blind omission that might help seal her doom as certainly as Nathan's hands?” (p. 613) という罪悪感に苦しめられてしまう。同じようなことは、Artiste 少年を売ることを選んだために、“the ordeal of his guilt” (p. 36) を味わう Stingo の曾祖父についても言えるし、妻 Sylvia が “a problem drinker” (p. 383) であるのを知っていながら自動車の運転を許し、結果的には彼女の事故死を招いて、“It's my fault, all mine!” (p. 384) と自責の念で苦しむ Dr. Blackstock にも当てはまることである。

もし選択という行為が、少なくとも人間の自由意志に基いた結果とするならば、選択の問題は、先に言及した運命の偶然性の問題と絡まって、Melville (彼の影響を Stingo は p. 14 で認めている) の *Moby Dick* (1851) の “The Mat-Maker” (47章) の一節を思い起こさせる。その中で Melville は、必然 (necessity) と自由意志 (free will) と偶然 (chance) が “interweavingly working together”³⁵⁾ することを、索畳織りのイメージを使って考察している。この三様の力の微妙な拮抗関係のバランスによって、個々の人間の生の営みは織りなされているが、その拮抗関係がどこかでわずかに崩れると、人間の幸運、不運、幸、不幸の比重に、Stingo と Sophie の人生が示すような耐え難い相違を生み出してしまうのである。この苛酷な現実、自然の営みに現われる不条理と、そして “death, and pain, and loss, and the appalling enigma of human existence” (p. 623) の圧倒的な力を、Stingo は Sophie と Nathan の劇的な生と死に接して、深く認識したに違いない。

Stingo は小説の結末部分で、アウシュヴィッツの世界に関する最も深遠な応答として、“The query: ‘At Auschwitz, tell me, where was God?’ And the answer: ‘where was man?’” (p. 623) という二つの文章を提示している。

問いの答えが問いの形にならざるを得ないところに、アウシュヴィッツの絶対悪の謎の深刻さが示されている。Stingo が口にできるのは、“*Let your love flow out on all living things.*” (p. 623) という、ただ祈りに似た言葉だけである。しかし、この言葉は “a reminder of some fragile yet perdurable hope” (p. 624) に過ぎなくとも、この朽ちることのないわずかな望みが、人間に “grief and nothing”³⁶⁾ の中から、無=死ではなく悲しみ=生を選ばせ、失望はしても絶望しない精神の抛り所を与えてくれるものであるように思われる。

Styron は Morris とのインタビューで、この地球では同胞であるべき人類が、憎しみと復讐心と同胞撲滅の欲求から、絶えず対立し合っている普遍的状況を嘆いたあと、“This seems to be the aspect of the human condition that never disappears, and I suppose all my work has been an effort to try to understand why.”³⁷⁾ と述べている。Steiner が解答として用意した “silence”³⁸⁾ (p. 265) を退け、安易な運命論者、悲観論者に墮することなく、人間の悪と悲劇の根を絶えず問い詰め理解しようと努めること、これが、文学の力でもって、現実の世界に匹敵する全体像を描き出そうとする作家 Styron の野望の根幹である。*Sophie's Choice* は、6年の歳月をかけた作者のそのような真剣で苦しい努力の見事な結晶体である。

〔注〕

- 1) Keen Butterworth, “William Styron,” in *American Novelists Since World War II* [Dictionary of Literary Bibliography 2] (Detroit, Michigan: Gale Research Company, 1978), p. 474.
- 2) 例えば処女作 *Lie Down in Darkness* は、好評を博して出版後一か月以内に2万8千部が売れ、出版翌年にはアメリカ芸術院ローマ大賞 (the Prix de Rome of the American Academy of Arts and Letters) が贈られている (James L. W. West III, “William Styron: A Biographical Account”, *The Mississippi Quarterly*, Vol. 34, No. 1 [winter 1980-81], 9). *The Confessions of Nat Turner* は出版1年以内に6刷を重ね、1968年にはピューリッツァー賞を受けた。更に1970年にこの小説は、5年ごとに最高傑作に贈られる芸術院のハウエルズ・メダル (the Howells Medal of the American Academy) を与えられている (*Ibid.*, 13).
- 3) John Gardner, “A Novel of Evil: *Sophie's Choice*,” *The New York Times Book*

Review, May 27, 1979, pp. 15-16.

- 4) John L. Cobbs, "Baring the Unbearable: William Styron and the Problem of Pain," *The Mississippi Quarterly*, Vol. 34, No. 1 (winter 1980-81), 24.
- 5) この言葉は *The Confessions of Nat Turner* の巻頭にある「作者の覚え書」の中で使われているもので、作者はこの作品を "a meditation on history" と呼んでいる。
- 6) Robert K. Morris, "Interviews with William Styron," in *The Achievement of William Styron*, ed. Robert K. Morris with Irving Malin, revised edition (Athens: The University of Georgia Press, 1981), p. 59. *The Southern Review* 誌とのインタビューでは、*Sophie's Choice* は "an extension of *Nat Turner*" だと述べている (Ben Forkner and Gilbert Schricke, "An Interview with William Styron," *The Southern Review*, No. 4 [Autumn 1974], 929)。
- 7) Morris, p. 57. 別のインタビューでも作者は, "both slavery and the concentration camps had the quality of institutions, despotic institutions" と述べて、二つの制度を同列の悪とみなしている (Forkner and Schricke, 931)。
- 8) William Styron, "Auschwitz," in *This Quiet Dust and Other Writings* (New York: Random House, 1982), p. 304.
- 9) 「絶対悪」という言葉は、小説の巻頭に置かれている André Malraux の *Lazare* (1974) の一節、 "...I seek that essential region of the soul where absolute evil confronts brotherhood" に現われているもので、この一文は *Sophie's Choice* を書いた Styron の創作理念を示唆している。
- 10) Morris, p. 56.
- 11) *Ibid.*, pp. 59-60. 作者は同じ主旨の考えを、"Auschwitz" (注8) と "Hell Reconsidered," in *This Quiet Dust*, p. 98 でも示している。
- 12) Allen Shepherd, "The Psychopath as Moral Agent in William Styron's *Sophie's Choice*," *modern fiction studies*, Vol. 28, No. 4 (winter 1982-83), 605-606.
- 13) Gardner, p. 1.
- 14) William Styron, *Sophie's Choice* (New York: Bantam Books, 1980). 本稿におけるこの作品からの引用は全てこの大衆版により、頁数を括弧内に示す。
- 15) James Atlas, "A Talk with William Styron," *The New York Times Book Review*, May 27, 1979, p.18.
- 16) Morris, p. 64.
- 17) *Ibid.*, p. 49. この語り形式を用いた意図として作者は、"My strategy was, well, the oldest story teller's strategy: to pull the reader in on the most basic level and then, by hook or crook, carry him to another level, and then another—to ascend vertically, so to speak." (*Ibid.*, p. 63) と説明している。
- 18) Ralph Ellison, *Invisible Man* (Penguin Books, 1965), p. 9.

- 19) これらの作品のほかに、Hawthorne の *The Blithedale Romance* (1952) と Faulkner の *Absalom, Absalom!* (1936) を挙げることも可能である。しかし前者では Hollingworth, Zenobia 等の主要人物を観察する語り手の Miles Coverdale が、そのまま作品の主人公になってしまっているし、後者では語り手が複数で、その一人の Quentin と物語の主人公 Thomas Sutpen との直接の接触はなく、物語構成もはるかに複雑になっている。ちなみに *This Quiet Dust* には、“O Lost! Etc.” (Thomas Wolfe), “An Elegy for F. Scott Fitzgerald”, “Robert Penn Warren”, “William Faulkner” 等 アメリカ作家に関するエッセイも含まれていて、彼らに対する Styron の熱い共感とか愛惜だけでなく、彼らから受けた影響も陰に陽に語られている。
- 20) Cobbs, 23.
- 21) これは作者自身がインタビューの中で、*Sophie's Choice* の構造について使っている言葉 (Forkner and Schricke, 932)。
- 22) Maria Hunt の物語は、Butterworth も指摘している通り、Faulkner の作品、特に *The Sound and the Fury* (1929) と *As I Lay Dying* (1930) の影響を受けた Styron が、Peyton Loftis の悲劇として処女作 *Lie Down in Darkness* に結実させている (Butterworth, p. 465)。
- 23) Shepherd, 608.
- 24) *Ibid.*, 608.
- 25) *Ibid.*, 609.
- 26) Styron, “Auschwitz,” p. 304.
- 27) Nathan が持つこの両面的役割と、彼の狂気には納得できる現実的な裏付けがあることを考えると、“Nathan is not a realistic character. He is a life force.” という Richard Pearce の見解 (“Sophie's Choice,” in *The Achievement of William Styron*, p. 290) は、一面的で受け入れ難い。
- 28) Shepherd, 609. 南部リベラル派の白人が北部に対して持つ反発は、北部の黒人が “the squalor and the poverty” (p. 34) の状態に置かれていると嘆き、“the North's 'patent on virtue'” (p. 357) を攻撃する Stingo の父親を通して示されている。
- 29) Malcolm Cowley, ed., *Writers at Work: The Paris Review Interviews* (New York: The Viking Press, 1959), p. 272.
- 30) Morris, p. 32.
- 31) Forkner and Schricke, 924.
- 32) Morris, p. 62.
- 33) *Ibid.*, p. 65.
- 34) *Ibid.*, p. 63.
- 35) Herman Melville, *Moby Dick or, the Whale* (New York: Russell & Russell, Inc., 1963), p. 270.

- 36) Faulkner の *The Wild Palms* (1939) の “Wild Palms” の物語の最後の場面 (5章 末尾) で、Harry Wilbourne が “Yes, ... *between grief and nothing I will take grief.*” と考える文章の中の言葉。Styron は Faulkner の告別式に参列したことを記したエッセイの中で、この Harry の選択のことを思い浮かべている (“William Faulkner,” in *This Quiet Dust*, p. 262)。
- 37) Morris, p. 56.
- 38) “silence” を拒否する姿勢は、Stingo 同様 (p. 265), Styron も言葉で明確に示している (“Hell Reconsidered,” p. 96)。

(英語学英文学助教授)

William Styron's *Sophie's Choice*: Choice, Guilt, and Fate

Hisao TANAKA

Sophie's Choice (1979), William Styron's autobiographical novel, deals, like his other works, with the nature of evil in all mankind: "our proclivity toward hatred and toward massive domination," the grievous proclivity which was embodied on the largest scale in the despotic institutions of slavery and the concentration camps. This paper, though analyzing the obsessions of three main characters, as well as exploring the issue of the

form of the first-person narration employed in this book, is primarily a study of its themes: the main characters' choices involving evil, their consequent ordeal of guilt, and the tricks or irony of fate coloring the whole of this novel.

Structurally similar to *Moby Dick*, *The Great Gatsby*, and *All the King's Men*, Styron's *Sophie's Choice* comprises two stories—the initiation of a young novelist and Southern WASP, Stingo, and the ordeal of a Polish Catholic woman, Sophie, who suffers from her painful memory of “the Auschwitz experience”—though the story of Nathan, a paranoid schizophrenic New York Jewish liberal, is splendidly entangled with the stories of Sophie and Stingo.

Thematically, the novel is intended to “radiate outwards” by using the awful moment of Sophie's choice in Auschwitz as a “metaphor”: the ordeal of her self-hatred and sense of guilt echoes not only the ordeal of Stingo's guilt about his abandonment of his mother and of Sophie and Nathan at the final moment, but the ordeal of Dr. Blackstock's grief and guilt toward his wife's death and that of Stingo's great-grandfather who chose to sell his black boy, Artiste, to a trader. The subject of the tricks or irony of fate is also meant to reverberate in the same way: Stingo, a descendant of the slave owners, receives his share of Artiste's sale, the tainted money which enables him to concentrate on his literary apprenticeship; Sophie's skill in typing and shorthand which she was compelled to learn by her tyrannical father helps her survive Auschwitz among a small elite; while her father, in spite of his idea of the extermination of Jews, becomes a victim of Nazi totalitarianism. Stingo has survived World War II, while Edward Farrell, also wanting to be a novelist, has died in the War, though both were almost simultaneously in Okinawa.

At the end of the novel, Stingo (Styron) has become aware of “death,

and pain, and loss, and the appalling enigma of human existence" universally inherent in the human condition, and is still aware of the glory of continuing a painful effort to plumb the depths of that enigma. *Sophie's Choice* is a splendid product of such an effort on the part of the author.